

京都大学地理学談話会

会報

第12号



2001

[目次]

寄稿	1
講演会の報告〔木下良先生・水内俊雄先生・水野真彦先生〕	2
研究室便り	6
＜GISシステムの導入＞	6
＜『京都大学所蔵古地図目録』の発刊について＞	8
＜国際交流について＞	9
＜研究室の動静＞	9
＜研究室の新メンバー＞	9
＜昨年度の実習旅行＞	10
＜学部卒業生・院生の進路＞	10
＜院生の研究状況の報告＞	10
＜学位の取得＞	11
＜2001年度講義題目＞	11
事務局から	12
＜地理学談話会 2000年度会計報告＞	12
＜訃報＞	12
＜お知らせ＞	12
＜企画展「近世の京都図と世界図」のお知らせ＞	13
＜2001年度地理学談話会講演会・懇親会のお知らせ＞	13

～寄稿～

元気で逞しく！

田中 和子（昭和54年卒）

今年4月に、福井大学教育地域科学部から京都大学文学部（大学院文学研究科）に転任いたしました。母校の出身教室であるとはいえ、新しい職場には違いなく、19年ぶりの大学構内や百万遍境界の変化にもとまどいながら、1ヶ月あまりが過ぎました。この間、一番目についた気掛かりなことについて書きます。

なんだか、元気なさそう

まだ、地理学教室に所属する学部生や院生の全員に会ってはおりませんし、会った学生が皆がそうであったというわけでもないのですが、なんとなく、線が細いというのか、おとなしそうというのか、パワー不足な感じが学生たちから漂います。福井大学からの転任に際して、大きな不安や心配がたくさんありましたが、どんな学生たちがいるのかな、についてはいささかの期待がありました。ややもすると不健康に傾きそうな「元気なさそう」な印象というのは、予想外でした。

勉強は楽しいか

卒業必要単位などの履修制度もずいぶん変更されて、学生の負担が軽くなっている分、昨今の京大生はクラブや同好会などの活動にとっても熱心と、教室の先生方に伺いました。学生生活を楽しむゆとりは十分にあるようです。では、勉強はどうなのでしょう？

5月上旬に新3回生の歓迎会が開かれた

際、ある院生から「学生時代、本を読んで勉強するのが楽しかったですか？」といった内容の質問を受け、面食らいました。正直言って、本を読んで勉強するのが楽しいとは、思ってみたこともありませんでした。

勉強に関連するさまざまな作業の大半（特に基礎的な部分）は、必要であるけれども、退屈だったり、時には苦痛だったり、のような気がします。楽しいと感じる部分は人によって様々ですが、個々の研究（大小いろいろですが）を山に見たてれば、頂上ちょっと前のワクワク感や、頂上で眺望を得たような錯覚とか（すぐにそれを遮るもっと大きな山脈に気づくのですが）は、やはり一種の楽しさですし、次のテーマに取り組むためのエネルギーかもしれない。私自身にとっては、頂上到達以前の段階にあるちょっとした楽しみが、むしろ大切なような気がします。たとえば、図や地図を描きながら、「おもしろそうなパターンが出てきそう」と感じるドキドキ感とか、モデルを構成する式を組み立て、プログラムを書いて、計画通りにプログラムを実行でき、しかも、それなりの結果が得られた時に感じる「理屈通りに完成した！」という達成感などです。後者の楽しさは、自分のイメージ通りに、うまく工作ができ上がったような感じに近いかと思います。

ある友人によると、「野外調査を基礎とする学問分野では、座学の空理空論からは新しいものは生まれません。他人の資料や既製品の統計ではなく、自前で収集したデータの中にこそ新しい発見がある。フィールドはおもしろい研究テーマとデータの宝庫だ。緑の中を歩いて、きれいな空気を吸って、大地に寝転がって空を見上げると、チマチマした下界を忘れて、視野が大きくなる。そして、現実世界と理論の間のあれこれをじっくり考える。こんな楽しい商売は

ない」そうです。また、教えた卒業生の一人は、「フィールドワークで、いろんな人と話ができて、触れあえるのってほんとに楽しい。教科書には載っていないことを教えてもらえる。社会科の中で地理を選んで良かった。お酒もいっぱい飲めてパーベキューもたくさん食べられたし」としみじみ言っていました。

当教室の学生や院生たちも、それぞれに自分の楽しさを見つけたり感じながら、勉強してくれていると思うのですが、いかがでしょうか？ ひょっとしたらあまり楽しくないのでは、とか、心が元気でないのでは、と感じるのは、前述した「線の細そうな」とか「パワー不足」といった印象のせいかもしれませんが、それが不要な危惧であってほしいと願っています。

人生は長い、人生はいろいろ

地理学を専攻している学生たちも院生たちも皆、今後、何らかの形で地理学研究や地理学に関連することを職業にしていくと決まっているわけではありません。したがって、地理学だけに楽しみを見つけてほしいとは望みませんが、それでも、地理学の専門課程で過ごす何年間かが、勉強の面でもそれなりの充実感を得、楽しい記憶としてもらえたらと願っておりますし、私の方もそうできるよう手助けしなければと考えています。研究を続ける希望を持っている院生たちには、勉強の楽しさの発見の他に、大きなテーマを足場に据えて息長く研究をする持久力も身につけてほしいと思います。

「勉強はできるできんやない、うまいかへたか」（ある新聞連載マンガのせりふ）だけのもので、生きていく中で係わるたくさんの要素のほんの一つです。自分自身の知らない才能や世界はたくさんあるし、それをいつ発見できるかも、あるいは誰が発見してくれるかもわかっていません。だから、

不安でもあるけれど、予期せぬ驚きもあります。学生の皆さんには、些細なことで挫折してしまわないタフさを何よりも望みます。

私も学ばねば

「この子はこんなことを考えているんだ」とか、「この子はこんなことがとてもうまい才能がある」とかいった、キラキラ光るものを見つけること、これは教える側にとって大きな楽しみです、学生から学ばせてもらう大事な部分です。教師と学生との間の相互作用の中では、元気で逞しい学生の側からの個性豊かな「→」に期待するとともに、教える側も学生への「←」を十分なものにする義務があります。当教室という恵まれた環境を与えていただいたことで、いっそう自らの研鑽に励まなければと気を引き締めています。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

～講演会の報告～

2000年10月28日、文学部において、談話会秋季講演会として、木下良先生、大阪市立大学助教授水内俊雄先生、大阪府立大学助手水野真彦先生に講演していただきました。



(講演をされる木下良先生)

古代道路研究の現況

木下良

(昭和 28 年卒)

1972 年に藤岡謙二郎教授を代表として科学研究費の助成を受け、24 名の歴史地理学研究者が分担して実施した全国の古代駅路調査の成果は、藤岡謙二郎編『古代日本の交通路』I～IV(大明堂、1978・9 年)となって刊行されたが、その後の新しい古代道路研究の出発点となり、私自身の研究もここに発している。

当時は、道路は時代を追って発達したもので、古代には道筋が特定できるような道路は存在しなかったとするのが、古代交通研究者一般の常識だったので、この調査では『延喜式』駅家の所在地比定を主要な目的として、道路は駅家をつなぐものとして 20 万分の 1 地勢図に想定線が引ければよいとされていた。

当時、直線的古代道路の存在を意識していたのは、既に 1970 年に山城や和泉・近江などで古代直線道路を復原していた足利健亮氏を始めとする少数の人々に過ぎなかったであろう。私自身は郷里の諫早市が肥前国船越駅の比定地であることなどから、肥前・肥後を担当することになったものであるが、たまたま佐賀平野を 16km 一直線に通る道路痕跡を認めることができたのは幸運であった。

この調査の最大の成果は、ローマ道と同様の直線的古代道路が各地に存在することが確認され、その道筋を空中写真や大縮尺地図によって辿ることができることが判明したことである。以来、全国各地で直線的古代道路の検出が相次ぎ、これらの道路は都城・国府・郡家の設置、条里制の施行、国・郡・郷の行政界の設定など、広く古代地域計画の基準線にもなっていたことが指摘され、

古代地域解明の重要な鍵となることが判明した。このことはまた考古学・歴史学分野にも影響を与えることになった。

すなわち、金坂清則氏が指摘した上野と下野の、また私が指摘した肥前の直線道路が、それぞれ発掘調査によって古代道路であることが確認され、以来全国的に古代道路の発掘が行われるようになった。その結果として、上野国では奈良時代の駅路と平安時代の駅路とは路線を異にし、道幅も奈良時代には 9m または 12m あったのが、平安時代には 6m に狭められたこと、また駅路以外にも 6m 級の道路が存在して、8 世紀末には廃道になったことなどが知られるようになった。

これらのことから、駅路の他に郡家間をつなぐ道路の存在が考慮され、私はこれを研究上の用語として伝路と呼ぶことにしたが、また平安時代初期に駅伝制の改革があり、駅路と伝路の統合整理が行われたことを指摘した。

歴史学においても古代駅伝制の新たな研究が行われるようになり、特に伝制についての研究が進展し、従来は伝制は駅制の補助的存在と考えられていたが、駅制と伝制は本来的に別の制度であることが指摘された。また、木簡・漆紙文書・墨書土器などの出土文字資料の増加によって、従来知らなかった駅名や駅伝制に関する新史料などが得られるようになっていく。

古代道路や古代交通に関する各分野の研究が進展したことから、これらの総合的研究が必要とされるようになり、1982 年に古代交通研究会が発足した。現在会員数 500 名を越え、地理・考古・歴史の他に国語・国文・民俗・さらには土木史などの研究者も加わっている。土木史の武部健一氏は古代道路と現在の高速道路とは同じ路線をとることが多いが、これらは共に既存の集落とは無関係に独自のサービス機関を備え、目的

地に最短距離で到達するように路線を設定するので、大地形的に自ずから同一路線をとるようになったものであるということを目指した。古代道路研究が現在に繋がることになる。

一方、日本古代道がローマ道と同様な直線的路線を持つことから、その比較研究も行われるようになってきているが、また日本の古代道路研究は、調査が遅れている中国を始めとするアジア諸国の古代道路研究にも大きく資することになろう。

(人文) 地理学の生き残り戦略

水内俊雄 (大阪市立大学)
(昭和 57 年卒)

昨夏、国際批判地理学会に参加した。ここでは、地理学が学問として庇護・認知されている日本やアメリカなどと違い、韓国や台湾などでは、国家という存在に学問が対峙せざるを得ない状況で、地理学や空間を考えざるをえないこと、そしてその努力の中でアカデミズムを高めていくプロセスと、批判地理学へと結びつく気運を感じ取った。

一方で日本に批判地理学は存在するのだろうか。もし存在するのなら、日本の批判地理学の流れとはどういうものなのであろうか。また、国際批判地理学会で提示された「地理学は何故保守的なのか」という問いが正当であるとすれば、何が保守的なのであろうか。「京都スクール」はそれに組してきたのであろうか。

発表者が地理学研究者として育てられてきた「京都スクール」には良質の教授陣が揃っているが、そこで育った研究者たちは、それぞれのアカデミックな関心を個店経営的に拡散してきたことは事実である。発表者は都市住宅問題からアプローチを始めて、

『都市と社会的不平等』や訳者の竹内啓一の講義に、地理学における社会科学的「真髓」のように接したことにより、京都スクールの地理学にはビビッドな「政治」がどうも欠けていると感じざるを得なかった。

さらに、竹内やその一橋門下の社会科学的な政治的アプローチ、異なるアプローチで社会科学性を追求する山本健児や内藤正典などがキーパーソンとなる可能性をその後期待させてくれた。

発表者は九州大学時代に、水津・竹内・野澤地理思想科研に加わる。これらの科研の功績は、地理思想(史)・地理的想像力の問題を学問分野のひとつとしたことであり、これらはテーマとしては諸学を越境していく性質のものであった。しかし、地理思想の持つ政治性に突っ込む議論には欠けていた。批判舌鋒するどい、富山時代の上司である浜谷正人からの企画・発信が、貧困な翻訳文化の是正、個店経営からチェーンストア経営への発展、政治性や珍奇さを求め、社会理論を導入する必要性を主張し続けたことにも感化された。

発表者はその後上に挙げた科研に若い世代を投入し、地理思想と社会理論指向研究者のメンバー的合流を目指した。さらに、日本地理学会の研究・作業グループや研究集会、ディシプリンの中での他流試合や特集号・連載の企画など、戦略としてしばらくの間、地理学的周縁からの発信というスタイルをとり続けた。そのひとつの成果が、大阪市立大学に赴任してからの出版物『社会-空間研究の地平』や、「空間・社会・地理思想」の発刊であった。

発表者の守備範囲内の人文地理学の現状において、欧米の社会理論がたとえばマルクス主義にインスパイヤーされたような、そうしたきっかけとなるような教育体制を日本で築くことは可能であろうか。また、地理学史・地理思想史をきちんと教えられ

るような体制や、そのための良質な教科書はあるのだろうか。われわれが社会学の教科書を読もうとする魅力を生かすような、魅力的な地理学の教科書がないことはどうも致命的である。さらに、既成学術雑誌があまりにもまっとうすぎる編集体制をとっているのも問題のひとつである。その編集方針自体は正しいが、それに代わりうる発信媒体として、たとえばカルチュラルスタディの書きっぷりも許容されるスタンスを保証すべきではないだろうか。

他の国に目を向けてみると、ホンコン大学やシンガポール大学は一大学でも非常に影響力は大きい。少なくとも6人以上の人文地理学のスタッフを有し、院生を毎年5,6人程度育ててゆく拠点大学、国際的な発信体制を日本にも是非築くべきであろう。その中における「京都スクール」の役割として、やはり個々の良質な研究の拡散が必要であることは言うまでもないが、そのためには学問的関心を「京都スクール」外の研究者ともシェアする姿勢が求められる。

大阪における中小企業ネットワーク とイノベーション

水野真彦（大阪府立大学）
（平成6年卒）

本報告の目的は、特許のデータを用いて、イノベーションの創出という視点から、大阪府の中小企業における企業間ネットワークを地理的に考察することにある。

現在、地理学や隣接分野において、経済活動におけるイノベーションの重要性に関心が集まっている。しかし、イノベーションの地理的側面に関する実証的・定量的な研究は最近ようやく始まったばかりであり、世界的にみても、まだ、地図化が始められたくらいの段階にあるに過ぎない。また、

日本においても、特許を地域的な観点から研究したものはほとんどないという状況にある。

そこで、本報告では、まず、特許データから、特許権者が大阪府の中小企業であり、かつ、特許権者が複数ある場合を抽出し、それを企業間の共同開発によるイノベーションとして把握することを試みた。そして、その共同登録相手の所在地を地図化するとともに、両者の直線距離をGISによって測定し、企業間の距離とイノベーションの関連、ならびに、その距離と企業の規模や業種との関連を考察する。対象は、1995年から1999年の5年間に登録された特許である。

はじめに特許庁が発表している全特許出願数を都道府県別に整理したのを見ると、東京都が圧倒的シェアを持つ。一方、今回抽出した大阪府下の中小企業が共同で研究・出願をした相手の所在地を地図化すると、大阪府の割合が高くなる。出願数と登録件数の違いがあり、単純に比較できるわけではないが、傾向として、共同研究においては、空間的な近接性が何らかの意味を持つことが推測される。そこで、具体的に、大阪の企業からその共同研究の相手の所在地までの距離を測ると、東京までの距離に相当する350-450kmの範囲ではその数が多くなるが、かなり高い割合で50km圏内に集中し、50kmを越すと大幅に減少している。このように、共同でイノベーションを生み出すには、相手との近接性が何らかの意味があるといえるであろう。

次に、その距離と企業の属性の関連をみでみる。まず、大阪の企業について、資本金、従業員数、創業からの年数と企業間距離との相関係数を求めると、それほど高くないが、有意な水準で、正の相関がみられた。これは、規模が大きいほど、また、創業からの年数が大きい古い企業ほど、遠

くの企業との共同研究を行い、イノベーションを生み出している傾向があることを示しており、同時に、その逆も成立している。すなわち、規模の小さいほど、また、創業からの年数の小さい若い企業ほど、近くの企業と共同研究を行っている傾向があることがいえる。また、企業間距離と相手方の属性の違いをみると、相手が上場している規模の大きい企業だと長くなり、上場していない小規模な企業だと短いという傾向がある。

さらに、業種別に距離をみると、輸送機械・精密機械では長いが、鉄鋼・一般機械・電気機械・プラスチックでは短いという傾向がみられる。この業種間にみられるの差には、次の二つの解釈が考えられる。一つは、鉄鋼・一般機械・電気機械・プラスチック製品などの業種は、近接していることが、イノベーション創出にとって重要であるという解釈である。もう一つは、これらの業種はもともと大阪に集積していることから、結果として、距離が短くなっているという解釈である。今回の分析ではどちらとも言えないが、大阪の特徴がデータに現れたと解釈する方が自然であろう。

以上の分析結果から、規模の小さい企業や創業からの年数が小さい若い企業ほど、近接した企業とのネットワークからイノベーションを生み出す傾向にあるといえる。したがって、ローカルなレベルでのネットワークは、特に小規模企業や創業年数の短い若い企業のイノベーション創出にとって重要であり、一方、大企業では全国レベルでのネットワークがイノベーションを生み出すことが考えられる。また、特定業種の集積は、小規模企業の同業種ネットワークから生じるイノベーションを促しているといえるであろう。

イノベーション研究は始まったばかりである。今回の結論もあくまで仮説であり、

これからの研究成果の蓄積が必要である。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

～研究室便り～

<GIS システムの導入>

石川 義孝

近年のわが国における地理情報システム(GIS)への関心の増大は、まことにめざましい。ちなみに、昨年春に早稲田大学で開催された日本地理学会のシンポジウム「GISは地理学にいかに関与するか?」では、22の発表があり、フロアには多くの聴衆が詰めかけ、おおいに盛況であった。地理学の教育・研究にGISが果たす役割はきわめて重要であり、GIS関連のハード・ソフトは、今やどの地理学教室にとっても不可欠となりつつある。

当教室においても、GISの持つ重要性には早くから注目してきた。非常勤講師として、平成8年度に高阪宏行先生(日本大学)、9年度に藤井正先生(大阪府立大学)、10年度に矢野桂司先生(立命館大学)、11年度に小長谷一之先生(大阪市立大学)、12年度に中谷友樹先生(立命館大学)、13年度に藤井正先生(大阪府立大学)、というように、GIS関連の特殊講義を毎年開講してきたのも、以上のような理由のためである。

とはいえ、GISの優れた能力は明白であるものの、関連のハード・ソフト・データがなにぶん高価であり、当教室のような規模の小さな教室が本格的なシステム導入に踏み切るとはとても難しかった。その結果、平成9・10年度の高阪先生・藤井先生には、GISの基本ソフトが全く入っていない状態で、また平成10・11年度の矢野先生・小長谷先生には、データを持ち込んでいたいて、それぞれ、GIS関係の授業をして

いただくという大変失礼なお願いをする事になり、今でもそれを心苦しく思っている。

教室で初めて GIS のソフト (カナダの Tydac 社製の <SPANS>1 セット) を購入したのは、平成 10 年度であった。その次の年度には、米国の ESRI 社製の <ArcView>3 セットが入ることになった。さらに、平成 12 年度の前期には、<ArcView>の追加導入、同じく ESRI 社製の <Spatial Analyst>などの新規導入がなされた。これらのソフトは、授業の便宜を考えて、当時の文学部博物館 4 階の地理作業室の PC や、文学部新館 3 階の総合情報メディアセンター端末室にある PC に、インストールせざるをえなかった。そのため、GIS の周辺機器の導入・接続や、教室や非常勤講師の先生の意向でソフト・データを充実していくことが、基本的に大変難しかった。

以上のような窮状をなんとか打開せねば、と思っていた矢先、きわめてラッキーなことに、平成 12 年秋に、文部省の特別予算である教育研究拠点形成支援経費 (略称、ミニ COE) が、地理学に心理学・言語学・社会学を加えた行動文化学系 4 専修から申請していた「空間情報分析システム」にあたり、平成 12 年度だけで 3,745 万円の予算の配当を受ける事になった。この経費は、教育研究費・非常勤研究員経費・外国人研究経費・教育研究高度化設備費の 4 費目に分かれているが、教育研究高度化設備費のみで 2,700 万円を占めていた。最大のシェアを持つこの費目の使用をめぐっては、当初他専修の希望があまり強くなかったせいもあり、地理学専修が中心となって予算の執行を考えることになった。

ただし、上記金額の高度化設備の導入は国際入札の対象となるため、導入予定の物品の詳細な仕様書を作成する必要があった。そのために、仕様策定委員会が結成され、

私が委員長に就くことになった。この仕様書作成は、11 月 17 日からの実質 1 週間で作成することを求められ、私を含む 5 名の委員は、きわめて慌ただしい、嵐のような作成作業を強いられた。11 月末から 12 月前半にかけて、京大の事務局によるチェックを経て、12 月中ばに最終的に、分厚い正式の仕様書が完成した。

12 月 15 日の官報でこの国際入札について公告がなされ、平成 13 年 2 月 5 日が入札締め切り日として設定された。その後、心理学専修の藤田和生教授を委員長とする技術専門委員会によって、応札業者の提出書類が詳細に検討された。なお、教室の石原先生も、この委員会のメンバーとして検討に参加された。そして、2 月 19 日に開札が行われ、パスコ社が落札業者に決定した。その後、納入をめぐる業者との打ち合わせや、地理学専修に導入予定のサーバーの管理をめぐる他専修ならびに文学部情報委員会との話し合い、および関連の配線工事を経て、地理学実習室をはじめとする行動文化学系の各部屋への物品の納入が 3 月 19 日から始まり、3 月 23 日には無事に検収を終えた。

今回、教育研究拠点形成支援経費によって、教室に導入されたハード、ソフト、地図・データは、以下のとおりである。

ハード

- ・サーバー [1 台]
< Compaq ProLiant ML350 モデル
T01 P8660-256K >
- ・カラー複合機 [1 台]
< Fujixerox DocuColour 1250 CPDA >
- ・クライアント PC [5 台]
< Compaq Deskpro EN
P933/128/60/NW >
- ・GPS(位置計測システム)[1 台]
< TRIMBLE 12CH Pro XR
GPS/BEACON TSC-1 2MB >

ソフト

- ・ SPSS 社製
 - <SPSS BASE 10.0J>
 - (10人同時使用可能)
- ・ ESRI 社製
 - <3D Analyst>
 - <Image Analyst>
 - <Network Analyst>

地図・データ

- ・ 日本地図センター製
 - <数値地図 2500 近畿 2府 4県>
 - <数値地図 25000
(行政界・海岸線) 全国>
 - <日本国勢地図 全国>
 - <細密数値地図 (10m メッシュ土地利用データ) 首都圏・中部圏・近畿圏>
- ・ パスコ社製
 - <25000 詳細地形図
(shape ファイル) 全国>

以上のうち、GIS ソフトとして定評のある ESRI 社製の上記の 3 種類に、既に教室に導入済みであった <ArcView> と <Spatial Analyst> を加えた 5 種類のソフトは、クライアント PC 5 台すべてにインストールされている。また、統計分析ソフトである SPSS と、地図・データはサーバーにインストールしており、ユーザー認証を受けた利用者のみがサーバーにアクセスできる。今回のシステム導入に伴い、若干の例外を除き、文学部新館にある地理学専修の部屋のすべての PC から、このシステムを利用することが可能になった。

なお、この教育研究拠点形成支援経費は、平成 12 年度から 3 年継続の予算である。今年度は、GIS 関係の特殊講義をご担当いただいている非常勤講師の藤井先生のご意向もあり、<MapInfo> をはじめとする GIS ソフト、商業統計データ、住宅地図なども、この予算を使って導入を進めていく方針である。

今後サーバーの管理という仕事はあるものの、今回の GIS システムの導入によって、GIS 環境の整備という点では、他の大学の地理学教室に遜色のないレベルにきた、と自負している。現在は GIS に強いと、研究職・企業・自治体のいずれへの就職にさいしても、明らかに有利である。今後、教室の院生や学部学生が積極的にこのシステムを利用して欲しい、と願う次第である。

<『京都大学所蔵古地図目録』の 刊行について>

平成 12 年度京都大学教育改善推進費(学長裁量経費)の交付を受けて、2001 年 3 月に『京都大学所蔵古地図目録』が刊行されました。本目録についてのプロジェクトは、当教室の金田章裕を代表とし、石原潤・石川義孝の両教官を含む 7 名のメンバーによって組織されました。本目録には、当教室関係古地図(現在、総合博物館古地図・古地誌収蔵室に収蔵)の他、附属図書館の貴重書庫・一般書庫・谷村文庫・中井家文書・室賀コレクション・大塚京都図コレクション・宮崎市定氏旧蔵地図、文学部日本史研究室所蔵絵図、総合博物館所蔵古地図、経済学部所蔵古地図、工学部建築系図書室所蔵古地図が収載されています。所蔵確認カード作製には、山村亜希(総合博物館助手)を中心に院生・学生の協力を得ました。従来、京都大学各部局には数多くの古地図が収蔵されておりますが、検索や利用が必ずしも容易ではありませんでした。本目録の刊行は、この状況の克服に向けての企図の一部であり、教育・研究のために活用されることを願うものです。個人に差し上げるだけの部数はありませんが、機関に備えるためには贈呈可能な残部がありますので、教室に御申し出ください。

＜国際交流について＞

昨年度末から本年度始めにかけて、海外から2名の先生方が来校され、講演をしていただきました。

3月24日には、シラキュース大学ドン・ミッチェル助教授が来校され、「People's Geographies –Migratory Labor, Free Speech, and the Making of the American West」と題した講演をして頂きました。

4月19日には、前マレーシア大学教授のP. K. Voon(文平強)先生が来校され、「Development of Malaysia from the colonial era to the present」と題した講演をして頂きました。

また、本年10月から6ヶ月間、イギリスのサセックス大学のアンソニー・J・フィールディング教授が当教室に客員教授として滞在され、講義もしていただく予定です。

＜研究室の動静＞

教室の事務は、引き続き真木智子さんをお願い致しております。

本年度は、研修員1名、特別研修コース1名、大学院博士後期課程5名、研究生1名、修士課程7名、学部4回生10名、3回生7名となっております。

＜研究室の新メンバー＞

本年度は3回生を7名、外部からの修士課程入学者を1名、カナダからの留学生を1名、教室に迎えました。簡単に自己紹介していただきます。

(3回生)

片寄 弘也

地理の部屋は文学部でも博物館でも高いところにあるので好きです。日本人の心のふるさと、京都の町を眺めながら、世界の様々な地域に思いを馳せるのはこの上なく趣深

いことに思えます。何事もやってみないと分からない、の心でいろいろ挑戦して行きたいです。

川平 夏也

今年度、学士入学をいたしました川平と申します。演習は田中ゼミです。埼玉県出身で、昨年度までは中央大学に在籍し、社会学を専攻しておりました。新しい生活にまだ馴染みきれておらず、様々な面で手探りの状態ですが、これからどうぞよろしく御願ひ致します。

久保 智祥

鹿児島生まれではあるが、福井と京都で育ったので九州男児の気概は微塵もない。福井の実家は天台宗のお寺。昨夏には比叡山に2ヶ月籠り修行した。突如として丸刈りになることが時々あるかもしれませんが、怖がらずにおつきあいください。

原 健太

高槻市在住の原です。中学の頃から地形図に親しみ、それなりに全国歩き回ってきました。かつては自然地形に興味を持っていましたが現在は鉱業に何となく心惹かれています。学問としての地理学がどんなものかまだよく分かっていませんがよろしく御願ひします。

福井 綾子

私はテニス(サークルに所属)をしたり、映画を観たり、美味しいものを求め食べ歩いたりするのが好きです。2年間、これらの趣味に没頭してしまい、知識不足なのですが、これから頑張りたいと思っていますので、多くの先生方、先輩方、よろしく御願ひします。

保江 志帆

茶道部に属していますので時々着物姿で登場することがありますが、どうぞ引かずに温かく見てやって下さい。田舎者であるが故に素朴なところが多々あります。素朴すぎる娘ですがどうぞ宜しくお願い申し上げます。

和田 泰典

自宅生です。通学に一時間半ほどかかります。一限の演習に遅刻しないか心配です。コンピューターが趣味です。コンピューターサークルに所属しています。研究室でUNIX系OSが使えたら嬉しいです。どうかよろしくお願いします。

(修士課程1回生)

遠藤 明

雨ニモマケズ風ニモマケズ雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ丈夫ナカラダヲモチ欲ハナク決シテ臆ラズイツモシヅカニ笑ッテイル一日ニ玄米一合ト味噌ト少々ノ野菜ヲタベアラユル事ヲ自分ヲ勘定ニ入レズニヨクミキキシ解リソシテ忘レズ中略一サウイウ者ニ私ハナリタイ

(研究生)

ティム・ライフェンスタイン
(Tim Reiffenstein)

私はカナダ人です。オンタリオ州の出身ですがバンクーバーのシャモンフレサー大学で勉強しました。今、日本語の勉強していますので、いつか皆さんとお話ができることを楽しみにしています。日本の楽器の会社について研究しています。

〈昨年度の実習旅行〉

2000年度は、10月16日～19日まで、岐阜県高山市において2回生・3回生の計9名が調査を行い、報告書を作成しました。

〈学部卒業生・院生の進路〉

*学部卒業生

井上悠輔 大学院医学研究科
岩間伸一 大学院文学研究科
氏家真紀子 大学院情報学研究科
北川哲也 日本写真印刷
郡田 篤 三菱自動車
福本 拓 大学院文学研究科
松井 威 日本道路公団

*修士課程

岩崎しのぶ 大学院文学研究科
上杉和央 大学院文学研究科
奥野 守 パスコ(株)
山神達也 大学院文学研究科

*大学院博士後期課程

李 禧淑 京都大学研修員
河野良平 島津ビジネスシステムズ
山村亜希 京都大学総合博物館助手

〈院生の研究状況の報告〉

今年度までの院生の研究状況をお知らせします。以下は、閲読を経た論文のリストです。

特別研修コース 今里 悟之

- ・ 村落の宗教景観要素と社会構造—滋賀県朽木村麻生を事例として—, 人文地理 47-5, 42-64 頁(1995)
- ・ 村落空間の社会記号論的解釈とその有効性—玄界灘馬渡島を事例として—, 地理学評論 72A-5, 310-334 頁(1999)
- ・ 村落空間の分類体系とその統合的検討—長野県下諏訪町萩倉を事例として—, 人文地理 51-5, 1-24 頁(1999)
- ・ 中国四川農村の村落領域と景観形成—成都市龍泉駅区二河村 14 組を事例として—, 地理学評論(掲載予定)

研修員 李 禧淑

- ・ 韓国における氏族マウル住民の移住と適応—ダム建設にともなう移住民・全州柳氏を事例として—, 人文地理 49-3, 1-21 頁 (1997)

D2 有留 順子

- ・ 性差から見た大都市圏における通勤パターン—大阪大都市圏を事例として—, 人文地理 49-1, 47-63 頁 (1997) 《共著》

D2 泉谷 洋平

- ・ 棄権率からみた国政選挙と地方選挙の関係—コンテクスチュアルな視点からの因果分析—, 人文地理 50-5, 83-97 頁 (1998)

D1 岩崎 しのぶ

- ・ 西大寺荘園絵図群と相論—文脈論的アプローチを用いて—, 人文地理 52-1, 5-27 頁 (2000)

D1 上杉 和央

- ・ 飛鳥・白鳳期における寺院の立地について, 史林 82-6, 125-149 頁 (1999)

D1 山神 達也

- ・ わが国における人口分布の変動とその日米比較, 人文地理 51-5, 79-96 頁 (1999)

M2 中村 尚弘

- ・ 元島民・子孫による北方領土返還運動の形骸化, 人文地理 52-5, 90-106 頁 (2000)

M2 村田 陽平

- ・ 中年シングル男性を疎外する場所, 人文地理 52-6, 1-19 頁 (2000)

〈学位の取得〉

平成 12 年度に学位を取得された方のお名前と論文題目は以下のとおりです。

*論文博士

高橋 美久二:「古代交通遺跡の研究」

久武 哲也:「文化地理学の系譜」

*課程博士

祖田 亮次:「サラワク・イバン人社会における人口流動と都市—農村関係の動態」

水野 真彦:「企業間ネットワークの地理学的研究」

山村 亜希:「日本中世都市の空間構造に関する歴史地理学的研究」

〈2001 年度講義題目〉

全学共通科目

教授 金田章裕 ポケットゼミ

*講義 (系共通科目) *

教授 石川義孝 地理学序説

特殊講義

教授 石原 潤 現代中国の地域構造

教授 石川義孝 アジア・太平洋地域の人口移動

助教授 田中和子 都市地理学の諸問題

人環教授 金坂清則 地理学における人物研究の諸問題

総人教授 山田 誠 比較地域形成論

人環助教授 小方 登 歴史空間論

理学部教授 岡田篤正 自然地理学

経研教授 藤田昌久 都市経済学

講師 加藤恵正 都市・地域経済研究

講師 野間晴雄 湿潤アジア六大デルタの開発史と農業・農村発展

講師 藤井 正 都市地理学と GIS

講師 溝口常俊 歴史地理学の創造

演習Ⅰ
 教授 石原 潤 地理学演習Ⅰ
 教授 金田章裕 地理学演習Ⅱ
 教授 石川義孝 地理学演習Ⅲ
 助教授 田中和子 地理学演習Ⅳ

演習Ⅱ
 教授 石原 潤 人文地理学の諸問題
 教授 金田章裕 〃
 教授 石川義孝 〃
 助教授 田中和子 〃

講読
 教授 石原 潤 英語地理書講読
 講師 中川聡史 ドイツ地理書講読
 人文研助教授 小山 哲 フランス地理書講読
 人文研助手 中西祐樹 中国地理書講読

地理学実習
 教授 石川義孝
 助教授 田中和子
 博物館助手 山村亜希

大学院演習
 教授 石原 潤 地域の諸問題
 教授 金田章裕 〃
 教授 石川義孝 〃
 助教授 田中和子 〃

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

～事務局から～

<地理学談話会 2000 年度会計報告>
 (2000 年 4 月 1 日～2001 年 3 月 31 日)
 【資金会計】
 <収入>

年会費 130,530
 前年度繰越金 375,065
 計 ￥ 505,415

<支出>
 運営費への振替 209,319
 次年度への繰越 296,096
 計 ￥ 505,415

【運営費会計】
 <収入>
 資金会計からの振替 209,319
 秋季懇親会会費 98,000
 春季懇親会会費 112,500
 計 ￥ 419,819

<支出>
 秋季懇親会経費 143,764
 春季懇親会経費 115,930
 会報等印刷費 50,000
 通信・文具等費 107,679
 弔電等 2,446
 計 ￥ 419,819

<計報>

前回の会報以降、次の方々が亡くなりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
 (確認分、括弧内の数字は卒業年、敬称略)
 奥村治八郎 (昭和 34 年卒)
 駒井 正一 (昭和 41 年卒)

<お知らせ>

以下の会員の住所が不明です。ご存知の方は談話会事務局までご一報ください。(数字は卒業年、敬称略)

朝井 小太郎 昭和 06
 生田 博文 昭和 51
 池内 麟太郎 昭和 48
 石角 強 昭和 45
 石原 大嗣 平成 09
 石村 裕輔 平成 04
 今井 平八 昭和 19

岩部 敏夫	平成 03
遠藤 正雄	昭和 53
大野 宏	平成 04
大山 晃司	平成 07
岡本 靖一	昭和 42
興津 俊之	平成 03
小口 稔	平成 03
楓 雅之(泰昌)	昭和 20
加藤 典嗣	昭和 63
川副 昭人	昭和 29
川添 和明	平成 07
貴志 謙介	昭和 56
坂部 誠治	平成 03
渋谷 良治	平成 04
新谷 泰久	平成 02
田島 渡	昭和 23
塚本 誠	平成 02
都子 屋	昭和 15
角田 以知子	平成 09
中川 訓範	平成 09
中山 耕至	平成 05
那須 久代	昭和 63
西尾 正隆	昭和 45
西沢 仁晴	昭和 49
西山 隆彦	平成 07
野田 茂生	昭和 36
長谷川 正雄	昭和 52
林 宏	昭和 16
福田 新一	昭和 46
松本 弘史	昭和 58
御手洗 央治	平成 05
森口 弘美	平成 06
山口 一郎	昭和 55
山下 和久	昭和 57
山下 良	平成元
山田(児玉)憲子	昭和 45
吉野 修司	平成 07
六嶋 美也子	平成 05

＜企画展「近世の京都図と世界図」

のお知らせ＞

京都大学附属図書館主催の企画展「近世の京都図と世界図—大塚京都図コレクションと宮崎市定氏旧蔵地図—」が、京都大学総合博物館開館記念協賛企画として開催されます。大塚隆氏の収集された類なき豊富な京都図および、宮崎市定元教授の所蔵された世界図が同時に展示されるという、豪華な企画展となっておりますので、是非お越しく下さい。

記

日時：6月1日(金)～6月30日(土)

(月・火曜休館)

午前9時30分～午後4時30分

(入場は4時まで)

場所：京都大学総合博物館(2階展示室)

入場料：(博物館入場料として)400円

なお、6月12日(火)午後1時30分から、当研究室教授金田章裕による記念講演会『近世京都図の特性』が、総合図書館(3F)AVホールであります。入場無料ですので、ふるってご参加ください。

＜2001年度地理学談話会講演会・懇親会

のお知らせ＞

本年は下記のように実施する予定ですので、よろしくお願い致します。

記

日時：10月27日(土)午後2時～5時

講演予定者：

アンソニー・J・フィールディング

(サセックス大学教授)

小方 登(人間・環境学研究科助教授)

山村亜希(京都大学総合博物館助手)

懇親会：同日午後6時より(会場未定)

☆本年度の談話会費（1000 円）を未納の方は、同封の振込用紙にてお払いくださいますよう、よろしくお願い致します。

★本年度は、名簿改訂の予定です（9 月発送予定）。恐れ入りますが、必ず、同封のがきにて、ご連絡先等をお知らせください。準備と印刷の都合上、6 月末必着でお送りくださいますよう、お願い致します。

【編集後記】

今年度の談話会報は早く仕上げる事ができました！やればできるんですね。これくらいのペースで論文がどんどん仕上がるというのですが…。御奇稿・御講演いただきました先生方、ありがとうございました。

編集 岩崎しのぶ
上杉 和央
山神 達也
真木 智子



会 報 第 12 号

発行日 2001年5月31日
発行者 地理学談話会
〒606-8501
京都市左京区吉田本町
京都大学文学部地理学教室内
TEL 075-753-2793(直通)
発行所 京都大学文学部地理学実習室
URL <http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geo/>